

「大丈夫」って言ってあげる

～ 新入園児と触れ合いながら、年長の自覚をもつ ～

<これまでの取組>

昨年、5歳児からとても優しく接してもらい、憧れの気持ちをもっていた。その修了児たちに「優しい、大きい組になってね」と言われたことから、「新しい友達を優しく迎えよう」「前の大きい組みたいに優しくなりたい」という気持ちが強くなってきていた。

新学期になり、保育室の環境や担任、周囲の友達の変化に戸惑う様子もあり、自分のことで精一杯の園生活であった。落ち着いてくると同時に、「優しい大きい組になったから、お手伝いもできる」と、5歳児として、新入園児（3歳児）の生活を手助けすることに意欲をもち始めたことから、登園後の世話を経験する機会をつくった。

初めての経験となることから、前日、どのような気持ちで接するのか、具体的にどのように手助けをするのか、話し合う時間をもった。「まず、おはようって挨拶をしよう」「靴の履き方を教えてあげる」「名前を見て、ここに入れるんだって言ってあげよう」など、意欲的に話している姿を受け止め、自信をもって行動できるようにしてきた。

<本活動のねらい>

- ・ 3歳児の世話を進んで行き、思いやりの気持ちをもつ。
- ・ 相手に分かるように、丁寧に自分の思いを伝える。
- ・ 世話をする中で感じたことを伝え合い、5歳児としての自覚をもつ。

<本活動での教育的意図>

- ・ どのように声をかけたらよいのか、相手の気持ちになって考える大切さに気付かせる。
- ・ 相手の様子に合わせて行動しながら、相手に分かる表現に気付くようにする。
- ・ 5歳児自身が困っていることを子ども同士で伝え合いながら、どうしたらよいか考えるようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども
 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

視点 子どもに育てたいこと
 教育的意図をもった働きかけ

○世話をすることについて話し合いをした次の日の登園後、3歳児20名（あか組）の保育室に行った。

A児 保育室でじっと立っているB児（3歳児）を見つけ、そばに行く。

「ここにかばんを入れよう」「コップとか出すよ」

B児 「……」

かばんをぎゅっと持ったまま、手を離さない。

A児 「ねえ、かばんを置こう」と、手を伸ばす。

B児 泣き出す。

5歳児 立ちすくんで、じっと見ている。

指 「どうしたのかな、びっくりしたのかな」

A児 「かばんを置こうって言ったけど……」

徳 子どもの思いに共感しながら、相手の今の気持ちを考えられるように言葉をかける。

困った顔で、B 児を見ている。 社会生活との関わり等 指 「かばんを置きたくないのかな」 A 児 「それじゃ、朝の片付けできないよ」 つぶやきながら B 児のそばから離れ、他の 3 歳児の身支度を手伝い始める。 道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え等 指 A 児の葛藤を見守りながら、他の 5 歳児とともに B 児の世話をする。 ○その後、クラスの保育室に戻ったときに、話し合いの機会をもった。 指 「今日、初めてのお手伝いをしたね。どうだった？」 子 「知っている友達もいた！」「かばんを閉めるのを手伝った」「コップをかける場所、教えてあげた」 言葉による伝え合い等 指 「そう。みんなに助けてもらって、あか組さん、きっと嬉しいって思っていたんじゃないかな」 D 児 「でも、ずっと泣いてる子もいた」 指 戸惑ったことを話し始めた様子を見守る。 子 「ずっと泣いていて大変だった」「こっちって呼んでも、来てくれないから困った」 社会生活との関わり等 A 児 「B ちゃんに、かばんを置こうって言ったら泣いたから、もう分からなくなった」 指 「そうだね、泣いている友達もいて困ったんだね。B ちゃんは、どうして泣いていたのかな」 子 「お家の人、いなかったもんね」「お家の人と離れて寂しいって思って泣いているんやわ」「ぼくも泣いたことある」 指 「あか組さん、お家の人がいなくて寂しくて泣いたのかな」 D 児 「ぼくらはもう、大きい組さんやから大丈夫やけど、小さい組さんはまだ寂しいねんな」 道徳性・規範意識の芽生え等 子 「小さい組さんだったとき、E ちゃんが遊んでくれたよ」「ぼくも、けがをしたとき、大丈夫？って言ってもらった」 指 「みんなも、大きい組さんに助けてもらってきたんだね」 A 児 「明日、お家の人がいなくても大丈夫って言ってあげる」 B 児 「大丈夫って、よしよししてあげよう」 自立心、協同性等 ○次の日、登園後に 3 歳児の保育室に行き身支度の世話をした。 A 児 かばんを持って泣いている B 児のそばに行く。 A 児 「一緒に用意しよう」 自立心等 B 児 「……お家に帰る……」（泣いている） A 児 「大丈夫、お迎え来てくれるよ。用意したら遊ぼう」「一緒にしよう」 話しかけながら、B 児の手をつなぎ身支度を手伝う。	知 行動を言葉に表して知らせ、相手の行動の意味を考えられるようにする。 徳 自分なりに解決できるように、すぐその場で声をかけるのではなく、見守るようにする。 知 友達が 3 歳児に関わっている様子も聞き、3 歳児のいろいろな様子を知ることができるようにする。 徳 3 歳児の気持ちを代弁し、年長としての自信につながるように、5 歳児のお手伝いについて認める。 徳 相手の立場になって考えることができるように、発問する。 徳・知 自分たちもしてもらったこれまでの経験を思い出せるように話し、3 歳児に心を寄せ、自分にできることを言葉で伝えていけるようにする。 
---	---

B 児 泣きながらもA児についていき、身支度を終えた。 指 片付けを終え、何をして遊びたいかB児に聞き、絵をかくことになった。 A 児 「あげるね」 かいた絵を、B児に渡す。 B 児 笑顔になり、受け取る。 F 児 「手伝うよ」 G児（3歳児）のかばんに手を伸ばす。 G 児 「だめ」 かばんを離さない。 F 児 「手伝ってあげるって言ってるのに」 困り顔で G児の身支度の様子を見ている。 ○その日も、クラスの保育室に帰った後、話し合いをもった。 A 児 「最初から泣いてたけど、大丈夫って言ってたら本当に大丈夫になってた！」 <u>協同性・道徳性・規範意識の芽生え等</u> 子 「一緒に遊んだら、泣かなくなっていたよ」 「あか組さん、お家の人がいなくても頑張ってた」 指 「嬉しいね。みんなの“大丈夫”の気持ちが伝わったんだね」 F 児 「でも、手伝おうと思ったのに、怒っている子もいたよ」 指 「F君は、どうしてあげたかったのかな」 F 児 「かばんを開けてあげようとしたら、だめって言ってた」 子 「自分でやりたかったんじゃないかな」「もう、やり方分かるって言いたかったのかも」「だって、お茶くださいって言って、自分でお茶飲んでたもん」「自分でコップもかけてたよ」 指 「あか組さんも、お手伝いしてもらって嬉しかったと思うよ。きっと、手伝ってもらったことを覚えていて、自分でできることも増えてきたんだね」 子 「明日も、お手伝いに行こう」「できるかなーって見ててあげる」「できなかったら教えてあげよう」 指 「さすが、大きい組さん」 <u>道徳性・規範意識の芽生え等</u>	徳 クラスで何度も話し合い、友達の経験を聞いたことも生かしながら、<u>自分なりに解決できるようにしていく。</u> 徳 親しみをもって、年下の友達に関わりをもつよう、友達の様子や思いに気付くように知らせる。 徳 相手の気持ちを考えながら行動できるように、相手の気持ちに気付かせる。 徳 年長としての充実感や自己肯定感を味わい、自信をもつように、認める。
【考察】 ・指導者が状況に合わせて3歳児の気持ちを代弁することで、相手の気持ちを受け止め、必要なことを察して世話をする姿が見られた。また、年長として接したい気持ちがさらに高まっていく様子が見られる。友達の経験を聞く機会をもつことで自分の行動を振り返り、3歳児の気持ちも考えることができ、年下の友達を助けることができたという思いやりの気持ちが育まれる。 （自立心、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等） ・自分と相手の思いが違うこともあるということを知り、どう対応したらよいか葛藤する場面が見られたときも、指導者は、その場面で解決法を伝えるのではなく、自分の行動を振り返るような言葉をかけた。特に、5歳児は年下の友達に対して「守ってあげたい」「助けてあげたい」と思うが、相手も「こうしたい」と思う気持ちがあり、その思いも理解しなくてはいけないことを感じていた。この経	

験を通して、相手に分かるように言葉を選びながら、丁寧に伝えることの大切さも感じることもできた。
(自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等)

- ・指導者は、子どもたちの思いに共感しながらも、まず体験させ、そのときに子どもが感じたことを振り返る機会をもちながら、クラス全体に投げかけていくようにした。解決方法を示すのではなく、どうしたらよいか自分なりに考えたり、友達の意見を聞いて考え直したりするなどの伝え合いをする中で、考えの幅が広がり、様々な意見を受け入れることができるようになっていく。そのことが、5歳児として自信をもって生活をしていくことにつながる。

(自立心、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等)

今後に向けて

- ・今後、友達とイメージを共有したり、共通のルールを考えたりしながら遊ぶ経験も増える。また、近隣の小学生や地域の方など、いろいろな方々との関わりも多くなる。今回の、年下の友達との関わりを通して得た経験から、自分と相手との思いが違うこともあるということを意識しながら、相手の立場に立って考えたり、気持ちを知らうとしたり、その状況に応じて行動したりして、自信をもって人と関わっていけるようになってほしい。



風車と一緒に走ったら楽しいなあ！

～風を受けて力いっぱい走る心地よさを味わう～

<これまでの取組>

4月下旬から5月にかけて、子どもたちはこいのぼりが風になびく様子を友達と一緒に眺めながら「鯉のぼりが泳いでる！」と、声をあげて喜んでいました。数日が過ぎ、「今日は、鯉のぼりが暴れてる！！」「風がいっぱい吹いているからかな？」などと、話し合う姿も見られるようになり、風に関心をもち始めていた。そこで、保育室の窓際につくった風車を取り付けると、子どもたちは風車の回り方を見て風の強弱で回る速度が変わることに気付くようになり、風車を回すために自分で風を起こそうとすることもあった。

また、風車を持って走ると風車が回るのが楽しくて、速く走ったりスピードを変えたりして、何度も行ったり来たりして遊んでいた。

<本活動のねらい>

- ・友達と一緒に風を受けながら、力いっぱい走る心地よさや楽しさを味わう。
- ・風車の遊びを通して、風に関心をもち、

<本活動での教育的意図>

- ・風に関心がもてるような経験を重ねる中で、友達と一緒に風を受けながら力いっぱい走る心地よさや楽しさを存分に味わえるようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

視点 子どもに育てたいこと
教育的意図をもった働きかけ

OA児とB児が、風車を持って園庭に出てきた。

A児「Bちゃん、風車持って一緒に走ろう」

B児「やろうやろう」

A・B児園庭を並んで走ったり、止まったりしながら園庭をぐるぐる回っている。

A児「風車と走ったら、音も聞こえてきて、楽しいな」

B児「カタカタいうてるなー」

A児「私のサラサラって聞こえる。風車持って走ったら気持ちいいな」

B児「風がいっぱい吹いてくるし、勝手に風車が回るし、おもしろい」

自然との関わり・生命尊重等

指「もっと遠くまで走ったら、ずーっと風車回って楽しそうだね。ジャングルジムまで、走ってみる？」

知 子ども自身が試したり考えたりしていることに共感したり受け止めたりしながら、風の強弱や風車の回る速度に関心がもてるようにする。

体 走る楽しさや気持ちよさが十分に感じられるように、少し離れたところの目標を投げかける。

A 児 「やってみる。私、ジャングルジムまで行って帰ってきたら、交代して、Bちゃんが走ることにしようか？」

B 児 「ええよ。待っとくわ」

A 児 思い切り走ってジャングルジムまで行き、戻ってくる。
「はい、Bちゃん交代、頑張ってー」

指 「Aちゃんおかえり。ジャングルジムまで遠かったけど、ちゃんと帰ってこれたねー」

A 児 「全然、しんどくないよ。風車と一緒にやから楽しい」

指 「Bちゃんおかえりー、いっぱい走ったねー」

B 児 「いっぱい走ったよ。風車、ずーっと回ってた」

C 児 「僕もやりたい、よして」

D 児 「私もしたい」

B 児 「いいよーやろうやろう」

A 児 「4人いるから2人で走ることにする？風車2つあるし、風車を次の人に渡して走ることにしよな」

子 「うん、わかった」 道徳性・規範意識の芽生え等

B 児 「今度は、滑り台まで走って帰ってくることにしよう」

A 児 「さっきより遠いけど、いい？」

C 児 「大丈夫。行って帰ってきたら交代やったな」

指 「スタートどこにする？」

A 児 「ここに、Oかいて待つとこつくろうか」

B 児 「先生、Oかいて」 道徳性・規範意識の芽生え等

O2チームに分かれ、各チーム1人ずつ走っては滑り台で折り返し、次の友達に風車を渡して交代を繰り返していた。 健康な心と体等

C 児 「うん！風車を高くして走ったらすぐクルクル回っておもしろい!!」 自然との関わり・生命尊重等

指 「走っている間、ずっと、風車回ってるね」

D 児 「僕も高く上げてみよう、やってみるわ!!」

C 児 「こうして、風車を高くして動かさないようにしたらよく回るよ」

D 児 「わかった！」走って戻ってくる。

「思いっきり走ったら、風がきて風車がクルクルクルクル回った！」 健康な心と体、思考力の芽生え等

C 児 「Dちゃん、風車が回ったら走るのが速くなってる！」

指 「ほんまやね！風と一緒に走っているみたいで、気持ちよさそうやったね！」

D 児 「うん！風車と一緒に走ったら楽しいなあ！」

指 「友達が走っているのを見ているのも楽しかったね。」

A 児 「2人も楽しいけど、いっぱいも楽しいよなー」

C 児 「そうや!!風車をバトンにして、エンドレスリレーしたらいいやん！」 協同性等

体 走り切った達成感が感じられるように、友達のところまで帰ってこれたことを認めていく。

徳 子どもたち自身が、より遠くまで走ってみることや人数に合わせた遊び方を工夫するなど遊びの中でよりよいルールを考えたり、遊びそのものを楽しめるように考えていることを見守りながら、集団で遊ぶときの環境を必要に応じて子どもたちと一緒ににつくっていく。

知 子ども一人ひとりが考えたり工夫したりしていることを言語化して認め、他児の気付きにもなるようにする。

体・知 風を感じながら思いきり走る心地よさを感じたり喜んだりしている姿に共感し、さらに走って遊ぶことへの意欲につなげるようにする。

体 友達と一緒に思う存分走って遊び、満足感を味わえるように、十分な時間をもつようにする。

子 「それ、いいなあ！！」

風車をバトンにして、全員でエンドレスリレーを存分に楽しんだ。

健康な心と体等

【考察】

- ・『風』について友達と考えを出し合い、風車の持ち方や走るスピードを上げると風車がよく回ること等に気付き、風を受けながら力いっぱい走る心地よさを味わったり、繰り返し走って遊ぶことを存分に楽しんだりすることにつながった。また、自分が走ることが楽しいだけではなく、友達が走るときに、風車が回る様子を見ていることに楽しさを感じることもできた。「風車」を回したいという気持ちの高まりから、走ることへの意欲は高まったと思われる。

(健康な心と体、自然との関わり・生命尊重、思考力の芽生え等)

- ・「ジャングルジムまで、走る」という目標を投げかけたことで、少し遠いところまで、2人で一緒にずっと走ることより、1人ずつ走ることを考え、「交代する」というルールが生まれた。遊びに参加する子どもが大勢になってきたので、子どもと共にスタート位置や待機場所を決めて分かりやすいように表示したことが、みんながルールを理解し、守って、継続して遊ぶことにつながったと思われる。

(道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い等)

今後に向けて

- ・今後も継続して、子どもたちが意欲をもって走ることを楽しめるように、いろいろな活動の中に、走る要素を取り入れたい。また、いろいろな運動遊び（リレーや競技）にも発展させていき、主体的に取り組んでいけるように、必要に応じて、ルールや約束を子どもたちでつくっていけるように支えていきたい。さらに、幼児期に楽しみながら体を動かす経験を十分に積み重ね、就学後も意欲的に体を動かす活動に取り組むための基礎を培っていきたい。



いっぱいとれたな～

～エンドウの収穫から、数量に関心をもつ～

<これまでの取組>

昨年度、5歳児がエンドウを育て収穫したところ、たくさんの収穫があったので、「このエンドウの種を秋に土に埋めて、育ててね」と種をもらい、プランターに蒔いて、水や肥料やりをして育ててきた。進級して、5歳児になったころからぐっとツルが伸び、大きくなっていくことを喜んでいた。花が咲き、少しずつ実がなりだし、昨年度見たときと同様のエンドウ豆になっていく様子に驚き、毎日見に行く子どもたちは、どんな様子だったかを他の子どもに伝える姿が見られる。

<本活動のねらい>

- ・エンドウの生長に関心を持ち、収穫を喜び合う。
- ・エンドウの大きさや、収穫した豆の量を比べたり、数えたりして、数量に関心をもつ。

<本活動での教育的意図>

- ・エンドウのツルが伸びている様子や実がついていく様子に関心がもてるようにする。
- ・ツルの長さやエンドウ豆の数など、友達と比べたり、数えたりし、長さや量の多少に気付くようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

視点 子どもに育てたいこと
教育的意図をもった働きかけ

A 児 「また、ツルが大きくなってる」

指 「何でわかるの？」

A 児 「この前、僕の胸のところやったけど、今日見たら、目のところまできてるー」

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「どこまで大きくなるのかな？また、教えてね」

○その日の降園時

指 「今日ね、Aちゃんが、エンドウが大きくなったって教えてくれたんだけど、みんなにもお話してくれるかな？」

A 児 「今日見たら、エンドウのツルな、目のところまで大きくなっててん。前は、胸のところやったのに」

B 児 「ぼくも、大きくなったなーって思ってたよ。白い花も咲いてたよ」

自然との関わり・生命尊重等

指 「へえ 先生も知らなかったわ。どれくらい咲いてた？」

A 児 「数えてないからわからんわ」

B 児 「明日、数えてみるわ」

知 エンドウの生長の気付きを認め、さらに愛着をもって育てていけるようにする。

知 1人の気付きからみんながエンドウマメの生長に関心がもてるように、具体的に話をし、投げかける。また、花の数を数え、花にも関心がもてるようにする。

○翌日、B児が、指を差しながら花の数を数えている。

B 児 「1、2、3、4、・・・いっぱいや。昨日よりも多い気がする」 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「明日は、もっと咲いてるのかな」

○翌日、A児とB児が、じっとエンドウを見ている。

B 児 「また、花が咲いてるわ」

指 「いくつ咲いてる？」

B 児 「数えるの難しいわ。いっぱい過ぎる」

A 児 「ぼくも数えるわ 下から数えるからB君は上からな」

A 児 「1、2、3、4、・・・ここまでで20 この花があったわ。

B君、ここまで数えて」 協同性、思考力の芽生え等

B 児 「18こあったわ。すごい、いっぱい」

A 児 「でも、隣もあるから、もっといっぱいやー」

B 児 「もっと呼んできて数えたら、全部数えられるよなー」
と友達を呼んできて、数えていた。

○数日後

A 児 「豆なってる!!」

子 「ほんまや ちっちゃいのがついてる」

子 「ここにもついてる」

B 児 「花が咲いた後に、できるねんて。前の大きい組さん言うてた」

A 児 「てことは、咲いてた花、全部豆になるってことやな。すごいな、いっぱいいっぱいできるんやな。いっぱいできたら、どうするー」

B 児 「みんなで採って、もって帰って食べようなあ」

自然との関わり・生命尊重、思考力の芽生え等

指 「いくつできるか楽しみやねー。みんなの分あるかな？」

B 児 「早く大きくならないかな」

○エンドウが少しずつ膨らんできていることに喜び、大きく膨らんできたのを見て、

子 「いつ、お豆さん、採ってもいいの？」

指 「いっぱいできたらね」

子 「いっばいって、どれくらい？」

指 「20個より多くできてたら、採ろうか」

A 児 「僕、数えるわ。1、2、3、4、……………20…」

指を差しながら大きいエンドウマメを数えている。

A 児 「先生、大きいのが20よりいっぱいあるよ。採ろう!」

指 「ほんとだねー いっぱいできたから、とっていいよ」

子 集まってきて、はさみでエンドウを収穫し、個々のカゴ

知 花を数えることで、たくさん花が咲いていることに気づき、花に関心がもてるようにする。



知 小さいエンドウができたことや花がマメになることを友達から聞き、共有したことをきっかけに、今後たくさんエンドウができることへ期待がもてるようにする。

知 数を数えて、エンドウを収穫してよいかどうか自分で判断できるように、日頃、クラスの人数を数えてきたくらいの数をもとに、目安となるようにする。

に入れている。

「いっぱいとれたなー」

指 「どれだけあるか、数えてみる？」

子 自分のカゴのエンドウ豆を広げたり、並べたりして、数えている。 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等
「15 個」 「8 個」 「21 個」

C 児 「いっぱいあり過ぎて、わからん」
1 個ずつ、カゴに移しながら数える。20 までは数えたが、そのあとは、数えられない。

指 「C 君のいっぱいやね。だれがエンドウを一番たくさん採ったのかな？」

子 「C 君か D 君、E ちゃん、比べてみて」

指 「どうやって？」

子 「並べてみる？」

C 児 「ここでは、並べられないよ」

指 「前に、ドングリ分けるとき、カップに入れて、比べてたよね？」

子 「そうや、カップに同じ数だけ入れて、数えるのやる？」

子 「カップ、そんなたくさんないで」

B 児 「ええこと考えた!! このタイルに、置いていこう。タイルに 5 個ずつ入れるのどう？」 思考力の芽生え等

指 「10 個でも入ると思うよ。やってみようか？」

C 児 「やってみる。D 君、ここ、スタートで僕の横のタイルに並べてな」 スタートのタイルの位置を揃える。

E 児 「私は、その横から並べたらいいな」

子 3 人が 10 個ずつ数え、タイルに置き、縦列に並べる。

E 児 「私のが、一番長いよ。その次は、D 君やね」

D 児 「E ちゃんのがいっぱいあるってこと？」

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「長いほうが、エンドウはたくさんあるってこと？」

C 児 「そうや。見たら分かるよ。僕のは短いから、少ないわ」

子 それを見て、同じようにタイルに置き始める。

指 「何個のタイルの部屋に、エンドウ豆が入っているか、この四角いタイルをみんなで数えてみようか」
指を差しながら数えていく。

子 「すごい、35 や」
それぞれのタイルごとに小袋に入れる。(10 個ずつ)

指 「このエンドウ豆、どうやってみんなで分けるか、考えようね」

子 「1 つずつ (1 袋) もって帰ろ」

子 「そうやな。みんなの分あるよな」

子 「みんな 1 個ずつ持ってー」

知 収穫したエンドウの数や量に関心
がもてるよう、まずは自分の数え方で自分で収穫したものを数えるよう投げかける。

知 数え方のヒントになるよう、去年、ドングリを数えて分類したときのことを思い出して生かせるようにする。(カップの中に、ドングリを入れ、カップを並べて比べていた)

徳 以前、種を 5 個ずつ分けた経験を生かして、少し頑張って取り組めるようにする。

知 みんなで数えるときには、数える対象が分かるように指を差し、量の多さを共有したり、数の多さに気付いたりできるようにする。

徳 いろいろな分け方があり、子どもたちなりに思いをもって分けていけるように、考えていく機会を作る。

子	「12個（12袋）もあまるわ」	
指	「余ったエンドウをどうするか帰るまでに、考えてみようね」	
	【考察】 ・前年度、5歳児からもらったエンドウの種から育てたことや収穫のお裾分けをしてもらった経験が、次は自分たちが育てるという意欲につながり、エンドウマメの生長に関心をもち、自ら関わって生長の早さや大きさに気付くことができた。また、エンドウの花を見つけ、花の数を数えたことや花の後にはマメができることを覚えていたことで、やがてエンドウが膨らみ、収穫することへの期待が大きくなった。 （自然との関わり・生命尊重等） ・遊びの中で、数を数えることは日頃から興味をもっているが、自分たちが育て収穫したものを数えることは、子どもたちにとって大きな喜びとなっていることが分かる。「たくさん」ということを数や量で感じさせたいと思い、並べることで量の違いにも気付くことができた。子どもたちが、「どれだけあるか知りたい」「数えたい」という探究する気持ちを引き出すように投げかけたことで、数え方や比べ方に経験を生かして考えることができたと思われる。 （数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等） 今後に向けて ・収穫したエンドウの分け方については、数を等分することを基本にしたが、余った分については、どのように分配をしていくか子どもたちが思いを出し合いながら、折り合いをつけていきたいと思う。一方で、昨年、自分たちがしてもらったように、小さいクラスにも気持ちを寄せて、エンドウを分けていけるようにしたい。	



ぴったり合ったあ

～リズム遊びを通して、友達と音が揃う楽しさを感じる～

<これまでの取組>

3歳児のときから5歳児が歌う園歌を聞いて、普段から園歌を歌っているので、大好きな歌の一つになっている。そこで、4月より、運動会に、園歌をみんなで楽器を使って奏でられないかと思い、園歌を歌ったり、時には指導者が歌の音を知らせて歌ったりし、子どもたちが興味をもって鍵盤ハーモニカで園歌が弾けるようにつなげていった。

昨年度、運動会で5歳児の子どもたちが、旗をもって音楽に合わせて踊っていたのを覚えていて、去年の音楽を流すと、「やってみたい」と意欲的に旗をもって踊りだした。振りが揃うと、子ども同士で気付き、喜び合う姿も見られた。

<本活動のねらい>

- ・楽器の使い方やバチの持ち方、使い方を知る。
- ・色々なリズムで楽器を鳴らす中で、友達と音が揃う気持ちよさや楽しさを味わう。

<本活動での教育的意図>

- ・楽器を正しく使い、バチを正しく持つことで、美しい音が鳴ることに気付けるようにする。
- ・リズム遊びを通して、友達と音を揃える楽しさを感じられるようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点 子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
指 「これ何か知ってる？」 A 児 「小太鼓！」 B 児 「年中の生活発表会で、僕、したよ」 C 児 「小太鼓するの、楽しみやなあ」 指 「<u>バチの持ち方や太鼓の打ち方をよく見ててね。楽器もバチもちゃんと使くと、素敵な音が出て、楽器も嬉しいんだよ</u>」 子 数人が指導者を見ながら、まねている。 D 児 「先生、僕の持ち方（バチ）、どう？」 指 「そうそう。さすがゆり組さんすごいね！バチの持ち方も合ってるね。まず、<u>どんな音がするか自分で叩いてみましょう</u>」 子 自分なりのリズムで太鼓を叩いている。 指 「<u>友達の音はどんな音、鳴っている？</u>」 A 児 「B君の音、トントントンって、大きいいい音」 指 「<u>B君の音みんなで、きいてみよう</u>」 C 児 「バンバンじゃなくて、ポンポンって、きれいな音や」	知 <u>正しい楽器の扱い方やバチの使い方を知らせ、美しい音を出すことに関心をもって取り組めるようにする。</u> 知 <u>音を出すことの楽しさを感じたり、打ち方によって音が違うことを感じたりして、楽器の音に興味をもつことが出来るよう言葉をかける。</u> 知 <u>正しくバチを持つときれいな音が出ることにつながることを知らせ、子どもが音を聞いて感じたことを受け止め、音に対して関心をもてるよ</u>

豊かな感性と表現等	
指	「ほんとやね、バチをしっかり持ったら、きれいな音がでるんだね」
B 児	「先生、今は簡単やったからもっと違うのをやりたい」
C 児	「やりたいやりたい。楽しいなあ」
子	何人かうなずく姿が見られた。
指	「じゃあ、次は先生が叩くリズムを真似ができるかな？」
D 児	「出来るよ！」
指	「タ・マ・ゴ・」（口でリズムを言いながら手本を見せる） ♪♪♪✓
子	指導者を見ながら、膝でリズムをとったり、目で動きを追ったり、頭を振ってリズムをとっている。
豊かな感性と表現等	
指	「もう一回するよ。先生の後で叩いてね！タ・マ・ゴ・はい」
E 児	「タ・マ・ゴ・」（口でリズムを言いながら叩いている。）
A 児	「簡単やなあ」
B 児	「もっと難しいのしたいなあ」
指	「次は少し難しくするよ。できるかな？」
C 児	「できる、できるやんな？」
	周りの子どもにも同意を求める。
子	うなずく。
指	「それでは、用意。ウン・タタ・ウン・タタ・タ・マ・ゴ・はい」（♪♪♪♪ ♪♪♪♪✓）
指	「こんなのできるかな？」
子	「やってみる」
	リズムを繰り返し口ずさみ、リズムを感じて小太鼓を打つ。
指	様子を見守る。
	「みんなで、小太鼓叩いてどうだった？」
B 児	「大きい音が出て、気持ちよかった」
A 児	「最初はバラバラだったけど、何回もやってたら、みんなの音が揃ってたよ」
指	「揃うってどういうこと？」
A 児	「トントントンって、友達とピッタリ合うこと」
指	「友達の音もよく聴いてるんだね。ぴったり合ったらどんな気持ち？」
B 児	「やったーっていう感じになる」
B 児	「先生、今も簡単やったからもっと違うのをやりたい」
子	「やりたいやりたい」 うなずいている。
B 児	「もっと難しいのしたいなあ」
指	「運動会の鼓笛でする幼稚園の歌のリズムでしてみよう」
E 児	「やったあ」
指	「リズムは、 ♪♪♪♪ ♪♪♪♪ だよ。歌を歌いながらしてみるよ。見ててね」

自立心等

自立心等

協同性等

うにする。

知音を聞くことの大切さも感じていけるように、指導者の音を聞いて、自分でも叩くように投げかける。



知今までの経験も生かしながら、リズムを変化させ、そのリズムに音を合わせていく楽しさを感じていけるようにする。

知自分でリズムを感じて、リズムに合わせたい気持ちが高まるよう、何回も自分で試すことができるようにする。

徳子どもたちが友達の音に関心をもって、音を揃えたい気持ちが高まるように、気持ちを確かめ合う。

徳少しずつ達成感を感じられるように、リズムを変化させていく。また、子どもたちが楽しみにしている運動会に目標をもち、みんなで頑張っていく気持ちが高まるようにする。

指 園歌の音階を歌いながら、リズムの手本を見せる。 「できるかな？やってみる？」 園歌を歌いながら、繰り返しリズムをとる。 子 指導者と一緒に園歌を歌い、リズムをとって音を口ずさむ。リズムに合わせて、小太鼓を叩くようになる。 A 児 「先生の歌とぴったり、できたなあ」 B 児 「皆の音が揃ってた」 豊かな感性と表現等 D 児 「私も、そう思う。揃ってた」 指 「そうやね。友達の音もしっかりと聴いてたんやね」 E 児 「もっとやりたい」 A 児 「明日も楽しみやなあ」 ○3日後、園歌のリズムを叩くことが出来るようになる。 A 児 「皆の音、揃ってた。ぴったり合ったなあ」 B 児 「運動会、他にどんな曲するのかなあ」 指 「どんな曲したい？」 子 「前の大きい組さんの曲がいいな。かっこよかったよ」 「この前歌ったのがいいな」 D 児 「運動会楽しみやなあ」	体 子どもたちが親しんでいる園歌を取り上げ、無理なく喜んで取り組んでいけるようにする。 徳 指導者に合わせるだけでなく、友達と合わせることに関心がもてるように、言葉をかけていく。
【考察】 ・正しい楽器の扱い方や用具の扱い方を知ることは、美しい音が出せることにつながるということを伝えることで、音を出すことだけでなく音に関心をもつようになった。正しいバチの持ち方は、子どもの手や体に負担をかけず、音を出して演奏を楽しめるようになると思う。楽器はきれいな音が出る大切なものとしてみんなが扱うことで、音を出すときの気持ちが変わってくると思われる。 (健康な心と体、道徳性・規範意識の芽生え、豊かな感性と表現等) ・子どもたちがリズムを感じているとき、膝でリズムをとったり、頭を振ったりしている子どもがいた。指導者が繰り返し、リズムをとったり、口ずさんだりすることで、自分なりにリズムを感じて、少しずつ重ねることでリズムが揃うようになった。どちらかという、指導者を真似て、指導者に合わせることに喜びを感じている。子どもたちが友達の音に関心をもち、友達と音が揃うことに楽しさを感じてほしかったので、友達の音を聴くことに気持ちを向けるようにしていった。実際は、きっちりとは揃っていないが、「ぴったり合った」という気持ちになったことは、少なくとも友達の音を聞き、関心をもっていると思われる。 (豊かな感性と表現、協同性等) 今後に向けて ・友達とリズムや音を揃えることでリズム遊びの気持ちよさを感じている。また、子ども自身がリズムを見つけて、表現する姿もあった。子どもたちから生まれたリズムを他の子どもたちと共有することで、友達の音や表現にも関心がもてると思われる。運動会という共通の目的をもち、子どもたちが生み出したリズムや表現をその中で生かしていき、充実感や達成感を味わい、友達と頑張った一体感や協調性が育っていくように、働きかけを工夫していきたい。	

ぼくら 走ってへんやん

～リレー遊びを通して、ルールを守る大切さに気付く～

<これまでの取組>

今までの園生活の中で、子どもたちは、いろいろなダンスや体操、簡単なルールのあるゲームやボール遊び、プール遊び等を通して、体を動かして遊ぶ楽しさを味わってきた。

9月に入り、さらに体を動かす活動に関心が高まってきた。「園庭をいっぱい、走りたい」という思いを指導者は受け止め白線でトラックを引くと、走る意欲が高まり、繰り返し走る姿が見られた。

指導者は、子どもたちが昨年度の5歳児とリレーを楽しんだ経験を踏まえ、リレー遊びへ発展させようと思通しをもっているが、まずは走る楽しさを存分に味わわせたいと考え、見守っていた。

子どもたちは「トラックを3周走った、友達を追い抜いた、いろいろな友達と走った」など、様々な経験を通して、走る心地よさを味わっていった。

数日後、5歳児数名が「前の大きい組さんみたいなリレーしたい!」「バトンがほしい!」と言いにきた。そこで、指導者は子どもと相談の上、2色のバトンを渡した。子どもたちは張り切ってチームを決め、走り出したものの、①バトンの受け渡しがいまいちかかない、②途中でチームが変わったり、抜けたりする子どもがいるために活動が続かない。指導者は、どのように子どもたちが解決していくか見守りながらタイミングを見計らい、子どもたちに声をかけて話し合う機会をもった。そして、リレーをしていた子どもに、困ったことなどを発言させながら、課題を整理し、自分たちでルールが決められるように働きかけた。

<本活動のねらい>

- ・ルールを守って遊ぶことの大切さに気付く。
- ・友達と遊ぶ中で、思いやりの気持ちをもつ。
- ・思い切り走る心地よさを味わう。

<本活動での教育的意図>

- ・思いを出したり、話し合ったりしながら、遊びに必要なルールを守る大切さに気付くようにする。
- ・数量に関心をもつ機会をつくり、経験の中で考えられるようにしながら、数量の感覚を養う。
- ・3・4歳児に自分たちの遊び方を伝える機会をつくり、子ども同士の関わりを広げる。
- ・走る経験を存分にさせ、楽しさに共感しながら、体を動かす心地よさや充実感を味わえるようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

視点 子どもに育てたいこと

教育的意図をもった働きかけ

OA・B・C・D児が中心となり、友達を誘っている。

前日、クラスで話し合ったルールを確認している。

子 「先生、たすき欲しい」

指 「しっかり、みんなで話してたね

バトンと同じ色のたすきを渡す。

A 児 「ぼく、青チームの最後走る!」

徳 認めの言葉をかけ、子どもたちが
自分で解決することへの自信や遊
びが進んでいく喜びが味わえるよ
うにする。

B 児「そしたら、私は白チームの最後する」	自立心等
子「たすきをつけて、順番が回ってくるのを待っている。」	
A 児「アンカーを走り終わり、「勝ちー！」と喜ぶ。	
青チーム「子どもたちは、喜んでいる。」	
白チーム「まだ走っていない子どもが残っている。」	
C 児「ぼくら、走ってへんやん」	
B 児「青チーム少ない。ほら（数えはじめる）7人、こっちは（数えて）10人、多いわ。これは青チームの勝ちと違う」	
D 児「同じ数にしないと、リレーにならへんやん」	
B 児「だから、青チームの勝ちと、違うわー」	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等
C 児「だれか、青チーム行ったらいいねん」	
E 児「じゃあ、行く」	
F 児「私も行こう」	
G 児「ぼくも」	
A 児「えーっ、そなんしたら、こっちのチームが多くなるやん！」	思考力の芽生え、言葉による伝え合い等
指「同じ数にしたいんやね。どうしたらいいかな？」	
A 児「あのさ、青と白チームで手をつないだら？」	
C 児「並んでー」A・C児の提案で、手をつないで並ぶ。	
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、思考力の芽生え等	
指「いいこと考えたね」	
H 児「前、玉入れしたとき、こうして数えたことあったなー」	
指「2人手をつないだら、同じ数になるよね」	
C 児「あれ？ 1ちゃん、手つなぐ人おらんの？」	
I 児「うん、一緒に走る人いないねん」	
B 児「そしたら、誰かが1回走ったら、次1ちゃんの所に来て、また走ったらいいと思う。前の大きい組さんとリレーしたとき、そなんしてた」	
A 児「じゃあ、ぼくが2回走る！1番に走るから」	
指「いい考えやね。でも、途中で分からなくならないかな」	
C 児「ここ来てーって、1ちゃんが言うたらいいねん」	思考力の芽生え等
子「人数の問題が解決し、リレーが始まった。園庭で遊ぶ3歳児、4歳児の子どもたちも「かっこいいー」「速いなあ」と関心を高め、憧れの気持ちをもって声援を送る姿も見られた。」	
指「今日のリレーどうだった？みんなで、楽しくできたよね」	
子「めっちゃ走るの気持ちよかったー」と喜んだ。	
健康な心と体、自立心等	

知「リレー遊びが、子どもたちで主体的に進められるよう、物的環境にも配慮し、バトンと対応できるようにする。

徳「困ったり、思いがぶつかり合ったりしたときには、友達と意見を出し合いながら互いの気持ちを理解したり折り合いをつけたりするような支援をするために、様子を見守る。

知「数に関心をもち、考えたり工夫したりしていることを認めたり、提案したりし、活動への意欲を高める。

知「子どもが考えた方法を認めながら、1対1対応の経験を遊びに活用し、数の概念の獲得につなげる。

知「今までの経験を生かし、遊びに取り入れている様子を認めながら、次の課題を予測し、提案をする。

体・徳「友達と目的意識をもち、活動への意欲やイメージを共有し、充実感を味わえたことに、共感し、認める。

○その日の午後、4歳児がバトンを持って、園庭をぐるぐる走っている。3歳児も4歳児を追って喜んで走っている。

指 「庭で、小さい組さんが、一生懸命走ってるよ」

子 園庭の様子を見に来る。 社会生活との関わり等

「Kちゃん、トラックの中、走ってるよー」

「Lちゃん、ものすごいゆっくりやな」

「3歳さん、にこにこして走ってる。楽しそうやん」

「ぼくらのリレー見て、やりたくなったん違うかなー」

指 「そうだね。小さい組さん、いっぱい見てたね」

「応援もしてくれてたよね」 社会生活との関わり等

J 児 「線の外、走りやー、こっちこっち」

E 児 「あ、Kちゃん、(トラックの)中にまた入った」

B 児 「こっち、こっち」K児と一緒に走る。

A 児 「Mちゃん、線の外やで」「あかんわ。聞いてくれへん」

指 「Mちゃんは、3歳さんやもんね」

A 児 「一緒に走ろう！」少し考えてから、M児と手をつなぎ、M児に合わせたスピードで、トラックを走り始めた。

J 児 バトンを離さないM児に「はい、渡す」

とかけ声をかけ、次の人に渡すことを知らせている。

道徳性・規範意識の芽生え等

指 「みんな先生みたい。優しいね。いいところあるなあ」

A 児 「先生、見て、ほらMちゃん、一人でトラック走ってる」

指 「ほんとだ！Aちゃんが上手に教えてあげたからやね」

A 児 嬉しそうな笑顔でうなずく。

I 児 「Lちゃん、あんな、手をいっぱい振るねん。足は前に出すねん。こんなんして」「そしたら、速く走れるから」と、横で声をかけながら一緒に走る。

言葉による伝え合い、社会生活との関わり、豊かな感性と表現等

子 「走るの速くなったん違うか？」

「小さい組さん、がんばれー」

指 「リレーで走るみんなもかっこいいけど、小さい組に優しくできるみんなも、とても素敵だね」

子 誇らしげな表情で、3・4歳児に関わっていく姿が見られた。

徳 年下の友達に関心をもつように、様子を知らせる。

徳 親しみをもって、年下の友達に関わりをもつよう、友達の様子や思いに気付くように知らせる。

徳 相手の気持ちを考えながら行動できるように相手の立場に気付かせる。

徳 年長児としての充実感や自己肯定感を味わい、自信をもつように認める。

知・徳 相手や場面に応じた伝え方を、自分なりに工夫している姿を認め、いろいろな友達に関わる意欲につなげる。

徳 3・4歳児に自分たちの遊び方を知らせる機会をつくり、成長の喜びを味わわせ、子ども同士の関係をつなぐ。

【考察】

- ・遊びが続かなくなった時も、指導者は子どもの思いに共感しながら一人ひとりの子どもが自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりしながら考えたり試したりできるように見守り、働きかけていった。自分たちで解決策を決定できるように支援することで、友達との関わりが広がり、決めたルールを守ろうとする気持ちが育まれる。また、主体的に活動するとともに遊びへの愛着も強くなっていく。

（自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等）

- ・指導者が、3歳児の友達の活動に関心をもてるように働きかけることは、遊びに自信をもっている5歳児の気持ちを揺さぶり、年少の友達に遊び方を伝えたい意欲を高めていく。5歳児が自分の経験をもとにして伝え方を工夫する中で、相手への伝え方や思いが通じたときの喜び、思いやる気持ちが育まれる。

（道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等）

- ・指導者は、子どもたちの思いを受け止め、自分たちで決めた活動ができるように、子どもからの要求や様子を見て必要なものを提供していった。環境を先に整えず、遊びにおける必要を感じたり、困ったりした際に、指導者や友達に相談したり工夫したりできることで、遊びの達成感や思い切り走る爽快感が味わえるようになる。

（健康な心と体、自立心、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等）

今後に向けて

- ・遊びや生活の中で培った規範意識（ルールを守る大切さ、みんなで守ることの大切さ等）をもとに困難なことに出会っても、自分たちで解決しようとしたり、よりよい考えを生みだしたりしていけるように、機会を捉えて支えていきたい。



座ってたら、タッチできない

～体を存分に動かして遊びながら、ルールを考える～

<これまでの取組>

好きな遊びの中で、『増え鬼』や『バナナ鬼』等、様々な鬼遊びをして遊ぶ姿が見られるようになった。気の合う友達やルールが分かっている友達を誘って一緒に遊ぶことで、思い切り走ったり、鬼になって互いに追いかけ合ったりする面白さや、納得している共通のルールで遊ぶ楽しさが感じられるようになってきた。そこで、指導者も一緒に体を動かして遊び、つかまらないように逃げたり、思い切り走って逃げたりする楽しさをともに感じるようにした。その中で、毎回、気の合う友達と遊ぶことから、ルールに変化がなく、面白さを感じにくい様子が見えてきた。

指導者は、いろいろな友達に目を向けながら、子どもたちが自らルールを考えたり、発展させたりしながら思い切り体を動かす心地よさを十分に味わえるようにしたいと考え、クラス全員での鬼遊びの活動を取り上げた。活動の前に、今まで遊んでいたルールをクラス全員で共通理解を図った。

<本活動のねらい>

- ・機敏な動きを楽しみながら、体を思い切り動かして遊ぶ。
- ・感じたことを伝え合い、自分たちでルールを考えながら遊びを進める。

<本活動での教育的意図>

- ・鬼遊びを楽しむ中で、体を存分に動かして根気よく遊ぶようにする。
- ・より楽しく遊べるよう、それぞれの考えを出し合い、自分たちで遊びを進めていけるようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点 子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
〇クラスで『手つなぎ鬼』をする。その後、クラスで活動を振り返る時間をもった。A児は困った顔をしている。 A 児 「・・・追いかけるの楽しかったけど、Bくんがずっと座ってて、タッチできなかった」 指 「そうか、Aくん、困ってたんだね」 A 児 「みんな走って逃げるの、楽しそうやってん。Bくんのことも、追いかけてようって思ったんだけど・・・」 指 「B君、どうしてたの？」 B 児 「あんな、走って疲れたから座って休憩しててん」 指 「座っていたらタッチできないっていうルールだったの？」 子 「そう。座ってたらタッチできないってこと」と口々にルールを話し出す。 A 児 「でも、座っているだけだから、疲れたとか分からなかった」 協同性、道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い等 C 児 「座っているだけじゃ、おもしろくないやん。逃げる人がいないと鬼ごっこ違うやん、おもしろくない」 D 児 「座るのは、なしにしたら？」 子 「そうしよう。しんどくなったら立っていて、逃げる時に走ったらいい」と意見が出る。健康な心と体、協同性等	徳 A児の困り感をみんなのこととして考えていけるように、A児の気持ちに共感する。 徳 遊びのルールを再度、共通理解しておく必要があると考え、再確認する。 徳・体 それぞれの思いから、遊びのルールの整理をし、鬼遊びをより楽しくするにはどうするか考えている様子を見守る。

B 児「ずっと逃げて走ってるの、しんどいよ・・・」
指「手つなぎ鬼を2回やって、Aくんはどちらも一生懸命走ってたもんね。タッチしようと一緒に懸命走る気持ちも分かるし、ずっと走ってばかりで、疲れるときもあるね。どうしたらいいかな」

E 児「休憩してもいいことにしよう」

A 児「でも、ずっと休んでばかりいたら、また、面白くなるんじゃない？」

健康な心と体、道徳性・規範意識の芽生え等

F 児「じゃあ、休憩する場所を決めたら？」

C 児「土管の下の青、黄色、ピンクの3つのタイヤのところにしたらどう？3人だけ休みってことにしよう」

A 児「そっか、休憩する人は3人だけってことになるから、いっぱい休憩するってことにならないね」

道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え等

指「なるほど！ 休憩する場所と人数を決めるんだね。Bくん、今の話を聞いていてどう思う？」

B 児「しんどくなったら休憩して、それからまた走れるし、いいと思う」

健康な心と体、自立心、道徳性・規範意識の芽生え等

A 児「このほうが、めっちゃおもしろいで！」

子「今度からそうしよう！」と同意の言葉が聞かれる。

指「いい考えだね。休憩したら、走る元気が出るよね。元気になったら、何回も、手つなぎ鬼できるかもしれないね」

B 児「休憩したら、元気ためて、次、いっぱい走れると思う」

○後日、休憩する場所を決めた鬼遊びを始めた。そのうち、4歳児も鬼遊びをしたいとやってきて、指導者は、そのことを5歳児に伝える。5歳児が鬼遊びのルールを教え、逃げるように伝える。

言葉による伝え合い等

A 児「走っててしんどくなったらな、タイヤのところだけは座って休んでいいねん」

B 児「3つあるから、休めるのは3人やで。いっぱいやったら、交代して休もう」

G 児（4歳児）「ここにいたら、タッチされない？」

A 児「タッチされても鬼にはならなくていいねん。でも、ずっと休んでても、おもしろくないで」

C 児「鬼が追いかけてきて、逃げるのがおもしろいねん」

B 児「逃げたり、休んだり、どっちもできる。休んでたら、次また元気になって走れるよ」

健康な心と体等

○鬼遊びが始まる

B 児「Gくん、こっちこっち、休憩交代しよか？」としんどそうに走っているG児を見て手招きをした。

B 児「ぼくは、元気出たからまた、逃げるね。G君も元気出たら、また逃げや」タイヤの場所を譲り、笑顔で走り出す。

徳いろいろな思いがあることを感じている様子を見守りながら、自分たちでルールを考えていけるようにする。

知・体B児の思いに心を寄せて考えたことについて、B児の思いを聞き、みんなが納得して遊びを進めていけるようにする。

体休憩することは、疲れを取るだけでなく、次に思い切り走る準備であることとしても考えていけるように促す。

徳4歳児に自分たちの遊び方を知らせる機会をつくり、遊びのおもしろさを、自信をもって知らせることができるようにする。

知自分たちで考えたルールを、自分たちの言葉で伝えていくように見守る。

G 児 「ありがとう がんばるわ」 A 児 「G君、つかまるでー 速く走りやー」 指 「休憩したらみんな元気になって、前よりも走るのが速くなってるみたい」 G 児 「わあ、お兄ちゃん、速いわあ 助けてえ」 A 児 「まてまてえ」 G児に対しては追いかける速度を変え逃げやすくしていた。 B 児 「G君は4歳やから、すぐにつかまらんように追いかけるの遅くしてるん？」 A 児 「そう そのほうが楽しいやん」 B 児 「そやな G君もずっと手つなぎ鬼やってるな」 A 児 「でも、大きい組は、本気でつかまえる」 健康な心と体等 B 児 「ぼくも」 指 「お兄ちゃんたちのいい考えで、小さい組さんも楽しそうやね」 ○その時々で相手を見ながら、機敏に体を動かして追いかけて遊んでいた。 健康な心と体、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり等	体 休憩場所をうまく活用して、活動に緩急をつけ、より充実している姿を認め、継続していけるようにする。 徳 遊びを楽しく続けていくためには、5歳児がその時々で判断して進めていることを認め、自分たちで遊びを継続していく満足感を共感できるようにする。
--	--

【考 察】

- ・鬼遊びでは、追いかける、追いかけられるという面白さを感じながら、走る速さを調整したり、機敏に動いたり、自分の体力に合わせて判断したりすることも必要で、それらに気付くよう、指導者も一緒に遊び、共感することが、体を動かす気持ちよさや楽しさを感じることに繋がっていった。また、休憩する環境も遊びの中で取り入れたことは、次への活力になり、より存分に体を動かすことができた。
(健康な心と体、自立心、協同性等)
- ・決まったルールではあるが、それが個々の思いと合わないこともあると分かったとき、自分たちでどう変えていけばいいのか考える機会をつくったことで、新たなルールもできた。必要に応じて話し合いの機会をもったり、どうしたらよいかを問いかけたりすることが大切である。困ったことがあれば思いを出し合い、自分たちで解決していくことで、決まったルールにも納得し守って遊ぶ楽しさをより実感する。(自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等)
- ・子どもたちが、より遊びを楽しくしたいと思っていることを指導者は受け止め、互いに意見を伝え合うようにしたことで、自分たちで遊びのルールを考えた、遊びをつくってきたという自信にもつながった。この経験から、関わる相手によって配慮し、相手も楽しく遊べるように自分たちの行動を調整し、その場に応じてルールを変えながら遊ぶ力がついた。活動への自信が、人とのふれあいへの自信にもつながり、主体的に遊びに取り組もうとする姿につながると分かった。
(健康な心と体、自立心、社会生活との関わり、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等)

今後に向けて

- ・友達と存分に鬼遊びを楽しむためには、同じルールで繰り返して遊ぶことから、新たな遊び方を工夫することが必要と思われる。困ったことやもっと楽しくしたいという気持ちの変化を、指導者が柔軟に受け止め、体を動かして遊ぶ楽しさ、スピード感、ルールの共有など、鬼遊びの楽しさを、時には指導者が提案していくことも新たな挑戦になると思われる。その中で、自分たちでルールを決めたり、変えたりできる柔軟な考え方をすることが楽しさの追求につながり、体を動かして遊ぶことが大好きな子どもたちに育つと考えられる。

まあるいのじゃないとあかんねん!!

～いろいろな材料を選んでつくる楽しさを味わう～

<これまでの取組>

先日、小学生と遊んだ活動が楽しかったようで、その時に小学生がつくったマツボックリけん玉、ドングリ転がしゲーム、走る車等、色々な材料でつくったおもちゃを見て、小学生に「おにいちやんすごいな」「この車、よく走るな」「どうやってつくったん？」と興味を示していた。

そこで、家庭から集めた、空き箱や牛乳パック、ペットボトル、カップ、棒材（ストロー、針金、割りばし等）卵パックや散歩で見つけたドングリやマツボックリ他、いろいろな材料を種類別に分けて置いた。すると、子どもたちは、小学生と遊んだおもちゃを思い出しながらつくり始めた。使っていた材料をよく覚えており、イメージもしっかりと持っている。

<本活動のねらい>

- ・つくりたいもののイメージをもって、つくる楽しさを味わう。
- ・いろいろな材料に触れてつくる中で、材料の大きさや形、長さ、数量等に関心をもつ。

<本活動での教育的意図>

- ・自分なりの考えをもって、工夫してついたり、つくり変えたりすることを楽しめるようにする。
- ・いろいろな材料を使う中で、比べたり、合わせたりしながら、必要な形や大きさ、長さや数量などに気付けるようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点 子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
OA 児とB 児が、「走る車をつくりたい」と言って、材料を探している。 A 児「小学校のお兄ちゃんの車、牛乳パックでつくってたなあ」 B 児「そうやった。牛乳パックたくさんあるから、車、いっぱいつくれるな」 指「そうやね。でも、牛乳パックじゃないとだめなのかな？」 B 児「違う箱でも作れるよ。四角のやったら、いいねん」 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等 指「四角の箱？どんな箱でつくるか探してみようか」 A 児「しかく♪しかく♪しかく♪・・・」 A・B児いろいろな箱を集めてきた。 指「いろんな箱、集めてきたね。箱の大きさも違うね」 B 児「全部四角やで。この箱やったら、どれでもつくれるよ」 子集めてきた箱で、車体をつくり始めた。 A 児始めは1つの箱で1体の車をつくっていたが、箱を上積み、つないだ。	知いろいろな材料に触れ、材料の形や材質に関心を持ち、つくっていく中で生かしていけるようにする。 知四角という形でもいろいろな形があることを実際に手に取ってみて知り、車をつくるために必要であるかどうか子ども自身で確かめるようにする。

B 児 菓子箱を使い、横に菓子箱をつなぎたいと同じ菓子箱を探していた。

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「Bちゃん、同じ箱を探してるの？」

B 児 「そう。これと同じ箱が欲しいけど、ないねん」

指 「この箱じゃないとだめなの？」

B 児 「この箱がいい。硬いから壊れないし、強い車がいいから」

思考力の芽生え、豊かな感性と表現等

指 「なるほど。Aちゃん、Bちゃんがこの箱と同じのが欲しいんだって。あるかどうか知ってる？」

A 児 「小さい組さんのところやったらあるかもしれないな。箱が違って、同じくらいのものやったらいいのと違う？」

B 児 「探してみるわ」

B 児 同じ箱を探したが無かったので、同じくらいの大きさの箱をいくつか見つけて、持っていた硬い箱の側面と合わせている。

思考力の芽生え、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「Bちゃん、同じ大きさの箱があって、よかったね」

B 児 「うん。ちょっと違うけど、いいねん 硬い箱やから」

指 「強い車になりそうやね」

自立心等

○A児、B児がタイヤをつけようと、タイヤになる材料を探していた。走る仕組みは小学生に教えてもらっていたので、ストローとひごを前もって指導者が用意していた。小学生の車は、ペットボトルのキャップを使っていた。A児はキャップを見つけてきて、穴を開けてほしいと指導者のところに来た。

指 「Aちゃんの車、大きいからもっと大きいタイヤがいいのと違うかな？材料は、いっぱいあるから見てごらん」

A 児 「四角い箱はいっぱいあるけど、まあいいのはないねん。タイヤやから、まあいいのじゃないとあかんねん。走らん」

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「丸いのは、あまりないのかな。友達に聞いてみようか」

A 児 近くで作っている友達に聞いて探すが、なかなか見つからなかったため、クラスの子どもたちに聞いてみることにした。

指 「Aちゃんが、車にタイヤを付けたいけど、材料がなくて困ってるみたい」

A 児 「タイヤみたいに、まあいいのが欲しいけど、ないねん」

子 「丸かったら何でもいいの？」

A 児 「タイヤみたいなまあいいのがほしい。みんな同じ形のまあいいのがほしいねん」

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

知 つくりたい車のイメージをもち、そのためにどのようなものが必要なのかを考えていけるようにする。

徳 自分のやりたいことを実現するには、時には友達の意見を聞いたり手伝ってもらったりすることも必要であることを知らせる。



徳 同じ箱がなくても折り合いをつけたことを認め、イメージした車をつくる楽しさを感じていけるように励ます。

知 ペットボトルのキャップの他にも使える材料がないか見つけ、手に取り活用できるか考えてみるように言葉をかける。

徳 自分のやりたいことを実現するには、時には友達の意見を聞いたり手伝ってもらったりすることも必要であることを知らせる。

知 「丸い」という形を他の子どもたちと共有し、丸い形状や性質に関心をもって、みんなの学びにつなげる。

指 「Aちゃん、いくついるの？」
A 児 「4つよりたくさんほしい」
子 「小さい組さんのところ見てきてあげるわ」
子 「家になんかあるかもしれへんから、探してくるわ」
A 児 「ありがとう」 言葉による伝え合い、協同性等

OB児は、発泡スチロールの球を見つけ出し、タイヤにしようとしていた。 思考力の芽生え等

B 児 「これ、タイヤにしたいけど3つしかないねん。あと1つ足りない」 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指 「他のもので、タイヤにできないかな？」

B 児 「これと同じまあいいの（球）じゃないとあかんねん」

指 「これは、難しいね。お団子みたいに丸いのかわいいのね。クラスの友達に聞いてみる？」

B 児 「いいこと考えた!! まあいいタイヤ、つくるわ」

指 「つくるの？」

B 児 材料置き場から新聞紙を取り、丸めて、発泡スチロールの球と大きさを合わせ、白いビニールテープで巻いて白い球をつくった。 思考力の芽生え、豊かな感性と表現等

B 児 「先生、タイヤできた。簡単にできたわ」

指 「Bちゃん、すごいね。新聞ボールがタイヤになったね。よく考えたね」

B 児 「前に新聞ボールつくったことあるから、すぐできたわ」 自立心、思考力の芽生え等

指 「どんな車になるのか、楽しみやね」

○翌日、A児のタイヤになる丸いものをクラスの友達が探し持ってきた。小さなジュースの缶、ガチャガチャ（カプセルトイ）のプラスチックケース、スプレー缶のふた、大きなボタン等があった。「4つ」ということもしっかり覚えていたようで、4つ以上持ってきた子どももいた。

A 児 「先生、まあいい缶のふたはあったけど、4つ、なかった」

指 「Aちゃん、みんな探してきてくれたよ。よかったね」
「これ全部、丸いもの？いろんな丸いものがあるね」

C 児 「そうやで。これは、下が（底）が丸いねん」 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

C 児 「丸いから転がるよ。ほら・・・」スプレー缶のふたを転がしている。「これやったらタイヤになるかなって」

思考力の芽生え、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

A 児 「ありがとう!! タイヤになりそうやわ。使ってみる」

A 児 丸いふたをタイヤにしようと車に合わせていた。

知 丸い形に関心をもつだけでなく、車のタイヤとして使うことを分かって探することができるようにする。



体 他にも工夫してタイヤにできることに気付くようにする。

徳 以前に遊んだことを思い出し活用して、作り上げたことを十分に認め、達成感を味わえるようにする。また、イメージしている車づくりに、さらに意欲的に取り組めるように励ます。

知・徳 みんなが協力してくれた喜びを共感し、「丸いもの」に子どもたちが関心をもって探したことを認めていき、「丸いもの」の形や質に気付いていけるようにする。

【考察】

- ・ B児は、これまでの遊びの中での経験を生かし、足りないタイヤを自分で作ることができた。これは、B児にとっては、諦めず自らの力でできたことにとても満足し、自信につながったと思われる。イメージをもち、いろいろな材料と向き合いながら、時には、難しいこともあるが、友達の意見を聞いたり、少し、助けてもらったりすることで、新たな発見があり、思いを実現していくことが楽しさにつながると思われる。
(自立心、協同性、思考力の芽生え、豊かな感性と表現等)
- ・ 車をつくる中で、「タイヤが欲しいので丸いものがある」という必要性が生じたときに、すかさず子どもたちに「丸いもの」について投げかけたことで、「丸いもの」に関心をもち、探した結果、「丸いもの」にはいろいろあることが分かった。また、タイヤにできる丸いものは、「転がるからタイヤにできる」ということも試しながら共有できた。材料に触れて、イメージをもってつくる中で、形を合わせたり、比べたり、試したりしながら、形や大きさを感じていった。その際に、一人の子どもの課題をみんなの課題としたことで、みんなの気付きになり、それがみんなの学びへとつながった。
(協同性、思考力の芽生え、言葉による伝え合い、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等)

今後に向けて

- ・ A児は、この後、友達が集めてきてくれたスプレー缶のふたや丸いプラスチックケースに穴を開けてもらい、ひごを通したが、ひごの長さや車体の幅との関係を考えていなかったのので、車に取り付けるとタイヤが車体にぶつかり、タイヤが回らず、走らなかった。「ひごをどれくらいの長さにすればよいか」を考えるように促し、分からないときは、友達の様子も見たり聞いたりして、自分で気付いて改良していき、「走る車」を実現できるように支えていきたい。



明日、氷できてますように！

～氷づくりを通して自然の変化に関心を持ち、探究心や好奇心を高める～

<これまでの取組>

稲刈り後の土にできた霜柱を見つけ「何これ？」と子どもたちは興味津々であった。「ふわふわの土やったところにこんなんできて」と、ふんわり柔らかい土にできやすいことを知った。「樺みたいなのいっぱいある！」「トゲトゲやな」と、感じたことを子ども同士で伝え合ったり「触ったら冷たい」と、氷の冷たさを感じたりしていた。

その頃、大きめのタライにできた氷にも驚き「スケートできるんちゃう？」などと言いながら、氷に手をのせて氷の感触や冷たさを共感する姿も見られた。

霜柱や氷を見たり触れたりして、氷ができる不思議さや「こんなところに氷ができるんだ」という驚きや感動を味わった。また、身近な環境の変化から、寒い季節に向かっていることを感じている様子だった。

<本活動のねらい>

- ・氷ができる自然現象に関心をもつ。
- ・どうすれば水が凍るのか（場所、容器など）意見を出し合ったり考えたり試したりしながら、氷づくりをする楽しさを味わう。

<本活動での教育的意図>

- ・氷ができる自然現象に不思議さや驚きなどの気持ちをもって、関わっていけるようにする。
- ・友達と一緒に考えたり試したりして、探究心や好奇心が高まるようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点 子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○数日前から寒い日が続き、毎日のようにタライやバケツに氷ができています。この日の朝も、子どもが数人集まり「今日も氷ができてるかな？」と、タライの様子を見に来ている。 A 児 「やっぱり今日も寒いから氷できてるなあ。めっちゃ冷たいなあ」 自然との関わり・生命尊重等 B 児 「ツルツルしてる！」 C 児 「スケートできるかな?!」 言葉による伝え合い等 A 児 「(タライ) 小さい無理やで、それに割れるんとちゃう？」 指 「また凍ってるね。昨日も凍っていたよね。何でやろ？」 A 児 「そなん、寒いからに決まってるやん」 B 児 「寒いからってできるとは限らんで！冷蔵庫ちゃうし」 C 児 「そやな、氷って冷蔵庫でできるもんな・・・」	知 子どもたちが氷ができたことに気付くことができるよう、タライやバケツに水を入れて置いておく。 知 子どもたちがなぜ凍っているのかを考えることができるよう話し合う姿を見守る。 徳 子どもたちで意見を出し合えるように問いかける。

- A 児「でも、外が寒い時でも、できるで！だって凍ってるやん」
- B・C 児「ほんまやなあ・・・」
- 指「じゃあ、どうやったらいいのかな」
- A 児指導者の問いかけにしばらく顔を見合わせ考えた後「氷つくれるかやってみたい！」
- B 児「わあ、実験みたい！」
- C 児「それいい！そうしょ！そうしょ！」
- 子やり取りに興味深そうに見ている。
- 指「Aちゃんたち氷つくるって言ってるよ。みんなはどうする？」
- 子様子を見守っていた他の子どもたちも集まる。
- A 児「でもどうやってつくる？」
- D 児「バケツに入れるのは？」
- B 児「バケツいっぱいないやん」
- C 児「砂場のおもちゃでつくったら？いっぱいあるやん」
- A 児「ほんまや！それいい！」

自然との関わり・生命尊重、言葉による伝え合い等

○ジョウロに水を入れ、その水を容器に入れて、どこに置こうかと考えている。

- 指「どこに置いても凍るのかなあ？」
- C 児「う～ん 太陽が当たらへんところがええんとちがう？だって溶けるやん」
- A 児「ほんまや！」 思考力の芽生え等
- A・F 児日の当たらないところ、誰も触ったりできないところを探し始める。
- B 児「ここにしょ」と、プールサイドを指さす。
- C 児「木の下にする」
- D 児「凍るかなあ」 思考力の芽生え等
- B 児「なんかワクワクするなあ」

○いつ凍るかと気になり、テラスを通るたびにテラスからプールサイドを覗いている。

- A 児「まだ凍ってないわ」
- B 児「早く凍らへんかな」
- C 児「まだやろ～」
- 思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重等
- 指「いつできるのかなあ」
- A 児「明日の朝かなあ」
- B 児「めっちゃ時間かかるなあ。なんかワクワクするなあ」
- C 児「明日、氷できてますように・・・」

○翌日、登所すると一目散に自分の置いた氷をつくっている器を見に行く。

- A 児「できてる！」

知子どもから試してみたいやってみたい！という気持ちがもてるように問いかける。

徳友達と共通の目的をもって活動を進めることの楽しさを感じられるように誘いかける。

徳子ども同士が氷を作りたいという目的に向かっていろいろな考えを出し合う姿を見守る。

知水や氷の性質に関心がもてるように今までの生活経験や知識を引き出していく。

知水が凍ることへの期待をもち、凍る過程等にも関心がもてるように投げかけていく。



B 児 「わ～丸いのできてる！本物の氷みたいや！」

C 児 「ペラペラの氷や」

D 児 「できてない・・・」

A・B・C児 「なんでやろ」

思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重等

指 「同じ場所やのになんでかな。何が違うのかなぁ・・・」

A 児 「入れもんがちがうなぁ」

B 児 「水入れすぎたんかなぁ」

C 児 「この入れもんはめっちゃ凍ってるで」（アルミのお盆）

D 児 「入れもんもめっちゃ冷たくなってる！」と、アルミ製のお盆が冷たくなっていることに気づく様子が見られる。

A 児 「なぁ、もう一回やってみよ！Dちゃん、今度は入れ物を替えっこしてあげる！」

D 児 「ありがとう！」 協同性、自然との関わり・生命尊重等

○入れ物を交換したり、水の量を少なくしたり増やしたり、場所を変えたりして、数日の間、繰り返し氷づくりを楽しんだ。

知 疑問に感じたことに考えを巡らせていけるように発問し、自ら試していけるような環境と時間を用意する。



知 同じ場に置いたが氷にならなかったという、新たな子どもの発見や疑問に共感しながら、自分の考えを実際に試すことができるようにする。

【考察】

・子どもたちが霜柱やバケツの氷を発見したことに指導者も寄り添い、氷の感触や冷たさなど自ら体験して味わったことの感動が、自分たちで氷をつくるという活動につなげたことで、さらに自然現象への興味や関心、試してみようという気持ちが高まった。

（思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重等）

・氷ができた喜びとともに、氷ができなかったことへの不思議さを取り上げたことで、子どもたちの氷づくりへの探究心が高まった。不思議に感じたことを自ら試して明らかにすることに喜びを感じている。このように、子ども同士が友達の考えを聞いたり、気付きを共感したりする経験が、さらに探究する喜びにつながると考えられる。

（協同性、言葉による伝え合い等）

今後に向けて

・「何でかな？」という気付きや疑問や「知りたい」という欲求から、「こうしたら、氷が早くできるかな」など仮説を立てて検証していく楽しさが味わえるように、指導者は、必要な環境や時間を準備することが大事だと考える。また、子どもの考えたことや分かったことを大切に、言葉で表現して共有していき、みんなで学び合えるようにしていきたい。

まわった！もっとやってみよう

～工夫や考えを「見る」「伝える」ことで、楽しさを共有する～

<これまでの取組>

3年保育の5歳児のクラスでほとんどの子どもが、手回しごまからひもを巻いて回すこまを楽しんでいる。毎日継続して取り組む中で、こまのコースをつくったり広い場所で回したりして、工夫しながら遊んでいた。

ある日、つくることが好きなC児が、保育室に置いてあった素材を使ってこまをつくり、それを回して遊び始めた。その様子を見た子どもたちは、次々にいろいろな素材を使って、手づくりのこまをつくり、それぞれにつくり方を工夫したり、回し方を試したりする楽しんだ。

また、既製のこまと手づくりこまの両方で遊びを楽しむうちに、既製のこまの上にいろいろな素材を載せて回し始め、友達同士で工夫の仕方を見合い、伝え合う姿が見られた。

<本活動のねらい>

- ・こままわしを存分に楽しみ、工夫したことを友達同士で知らせ合いながら、遊びを広げていく。
- ・「見る」「やってみる」ことで、「なぜ」という探究心や「こうすれば、こうなる」という予測など自ら環境に働きかけ、考えたり、学び合ったりする。

<本活動での教育的意図>

- ・繰り返し試すなど、見たことや経験したことを生かして、こまが回る仕組みに関心を持ち、法則性に気付くことができるようにする。
- ・遊びの中で気付いたこと、工夫したことを、順序立てて話したり、相手に分かりやすく伝えたりできるようにする。

子どもと指導者の姿 指 - 指導者 子 - 子ども
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

視点 子どもに育てたいこと
教育的意図をもった働きかけ

A 児 「こま回ししよう」

B 児 「ほら、回ったよ」

指 「すごい！よく回ってるね」 健康な心と体、自立心等

子 自分でひもを巻いて回せるようになった自信から、毎日こままわしを楽しんでいる。

○1月後半のある日、C児が保育室に置いてあった四角い形の容器に竹ひごを刺して、こまをつくった。

C 児 「これ、つくってん」

指 「Cちゃん、すごいね。自分で新しくこまをつくったのね。回してみて」 思考力の芽生え、豊かな感性と表現等

C 児 こまを回してみよう。

徳・体 こまを巧みに扱えるようになったことを認め、繰り返し取り組む意欲や、新しい遊び方に挑戦しようとする気持ちにつなげる。

知 発見したり、自分なりに工夫したりできるように環境（様々な容器、竹ひご、接着用具等）を整える。

「ほら、これって四角いけど、回したら丸になるねんで」 指 「ほんと、四角いのに丸くなってるね」 D 児 「へえー、見せて」 思考力の芽生え、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等 C 児 「ほら、な」と回して見せる。 D 児 「ほんまや、すごい」 社会生活との関わり、豊かな感性と表現等 D 児 C 児のこま回しに刺激を受けて、自分もつくってみようと材料を探し始めるが、どうつくればよいか迷っている。もう一度、C 児が手づくりこまを回している様子に目を凝らしてじっと見ている。 指 「Dちゃん、Cちゃんに聞いてみたら」 D 児 「Cちゃん、見せて」 協同性、言葉による伝え合い等 C 児 「Dちゃんもつくりたいの？見せてあげようか」 D 児 「見せて。ああ、こうするのか。ありがとう」 思考力の芽生え等 子 その様子を見て素材を使い出す。 E・F 児 2人で相談しながらつくっている。 E 児 「つくったけど、うまく回らへん」 F 児 「この棒の上をもっと短くしたら、回るんちゃうかなあ」 思考力の芽生え、言葉による伝え合い等 指 「棒が大事なのね」 E 児 「そうかな、やってみよう」とつくり直す。 E・F 児 その他にも、違った工夫が見られた。 協同性、思考力の芽生え等 指 「いろいろなこと、考えてるね」 G 児 「これをつけて回したら、どうなるかな？」と考えながら色紙をこまの上に置いて回すが、置いただけなのですぐに色紙は遠心力で飛んでしまった。 指 「どうしたらいいかな？」 G 児 「くっつけなあかんな」と思いつき、セロハンテープで色紙をこまの上に接着して回す。 思考力の芽生え、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等 G 児 「わあ、色が変わった！きれい」 A 児 「きれいな」 D 児 「Gちゃん、すごいな」 自立心、協同性、言葉による伝え合い等 指 「ほんと、きれいな色に変わったね。 先生もびっくりしたわ。みんなにも知らせようか」 Oそれぞれの工夫をクラス全体で知らせ合った。	知 イメージしたことを表現し、楽しさが感じられるよう、受け止める。 知 物の性質や変化に気づき、関心をもてるようにする。 知・徳 友達の姿に刺激を受け、やってみようとする気持ちを実現できるよう材料を整える。 徳 自分の思いを伝えたり、相手の思いに気づき受け入れられるようなきっかけをつくる。 知・徳 友達と考えを出し合い、試したり、工夫したりする姿を認め、見守る。 知 こまが回る仕組みに関心をもたせ、その仕組みや法則性に気付けるようにする。 知・徳 友達と一緒に考えたり、工夫したりして、繰り返し試そうとする姿を受け止め、認める。 知・徳 課題について考えを出し合い、互いの工夫を認めたり、さらに創意工夫したりするように投げかける。 徳 様々な工夫が見られたことを、クラス全体に知らせ、満足感や達成感を味わえるようにした。
--	---

【考察】

- ・ こまを回す活動を通して、自分なりの楽しみ方を見つけて遊んでいた。こま遊びの概念に捉われず、子どもたちの自由な発想を認め、受け止めていく指導者の姿勢や、子どもの「やってみたい」思いを実現することができるよう、準備物や空間などの環境の再構成をしていくことが大切である。

（健康な心と体、思考力の芽生え、豊かな感性と表現等）

- ・ 5歳児では、考えたこと、気付いたこと、知りたいことを言葉で相手に伝わるように話すことが、遊びをより楽しくし、広げていくことになる。指導者は助言しすぎず、見守りながら、共感し、コミュニケーションの橋渡し役を適切にしていくことが大切である。 （協同性、言葉による伝え合い等）

- ・ 5歳児V期なので、友達同士、互いのよいところを知り、認め合う関係ができています。友達の活動を「見る」、友達に「聞く」「答える」「伝える」というコミュニケーション力を育てるために、指導者は適切に助言したり、共感したりしていくことが必要である。 （協同性、言葉による伝え合い等）

- ・ 友達に刺激を受け「やってみよう」という気持ちで環境に関わった。してみたいことを自分の力で、自分なりに行うことで、充実感を味わった。このことが、うまくいかなくてもあきらめず、「なぜ」と感じ、「こうやってみよう」と工夫する姿につながっていくと考えられる。

（自立心、協同性、社会生活との関わり、思考力の芽生え等）

今後に向けて

- ・ こまが、どうしたらよく回るのかを試したり、工夫したりする姿が見られた。今は、よく回る理由が分からなくても、「四角いこまでも回すと丸く見える」とか「棒を短くしたらよい」などを、実際に試しながら感じている。直接体験を積み重ねることが幼児期には大切なので、子どもの心が動いたとき、指導者が「不思議だね」と子どもの思いに共感し、「なぜかな」と考えようとする態度を育てることが、学びを育むために大切な援助である。



一緒に縄跳びしよう！

～小学生との交流を通して自信をもち、就学への期待を高める～

<これまでの取組>

子どもたちはオリンピック選手に憧れ、いろいろな運動遊びに挑戦していた。中には、縄跳びに挑戦する子どももいた。A児も縄跳びに挑戦しようとするが、思うように跳ぶことができずすぐに跳ぶことをあきらめてしまっていた。

2月、就学に向けて、地域のいくつかの小学校と交流を重ねていた。A小学校では、授業や給食の様子を参観し、小学校生活のイメージが膨らんだ。B小学校では、こままわしやお手玉、おはじき等の昔遊びのコーナーで、小学生に遊び方を教わり、C小学校では、ふれあい遊びをしたり鬼遊びやドッジボールをしたりして、小学生に優しく接してもらった。小学校での様々な交流を通して、就学への期待をもち、安心感も芽生え始めていた。

D小学校との交流が近づき、幼稚園と小学校の指導者間で打ち合わせを行った。D小学校では、全学年の児童が参加する「縄跳びタイム」があると聞いた。幼稚園でも縄跳びをしていたので、就学に向けて自信をもったり期待を高めたりするよいきっかけになると思い参加するようにした。

<本活動のねらい>

- ・小学生との関わりを通して、小学生に安心感や信頼感をもつ。
- ・一緒に縄跳びをする中で、小学生に憧れの気持ちをもったり遊びへの意欲を高めたりする。
- ・小学生との交流を通して、就学への期待をもつ。

<本活動での教育的意図>

- ・小学生との交流に幼稚園の活動を取り入れ、安心して活動できるようにする。
- ・小学生に憧れの気持ちや、安心感、信頼感をもつことができるようにする。
- ・小学生との交流を通して、自信をもち就学への期待が高まるようにする。

子どもと指導者の姿 指・指導者 子・子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点 子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○9月 子どもたちは、オリンピック選手のようになりたいと、縄跳びやボール遊び、鉄棒等、自分なりに目標をもって取り組んでいた。A児は、縄跳びに挑戦しようとしていた。 指 「Aちゃんは、縄跳びに挑戦しているのね！跳べるようになるといいね」 A児 「・・・」（返事が返ってこない） 跳びたい気持ちがあり、しばらく頑張ろうとするが、なかなか跳ぶことができず、すぐに止めてしまう。 ○2月 D小学校へ行き、全学年の児童が参加する「縄跳びタイム」に5歳児が参加した。 A児 縄跳びに自信がなく、小学生（5年生）から少し離れ、一	徳 小学生と無理なく関わっていけるように、見通しをもって計画し、取り組んでいく。 体 A児の体力や運動経験を踏まえ、焦らずに、縄跳びを跳びたい気持ちが続けられるよう見守り、頑張りを認めていく。 徳 交流会に安心して参加できるように、小学生に憧れの気持ちをもてるよう、事前に小学校の先生と子どもたちの様子を共有したり、当日の先生や子どもたちの関わり方等を打ち合わせておく。

人で跳ぼうとしていた。 指「今、あそこでAちゃんが1人で縄跳びをしているのよ」とA児の近くにいた小学生に声をかける。 小学生「ほんまやな。行ってみよか」「名前は何?」 A児緊張して黙っていた。 小学生「Aちゃんっていうんだね。一緒に縄跳びしよう!」と短縄に書いてある名前を見て声をかける。 小学生「縄を回す時は、手首をくるくる回すねんで」 A児教えてもらったとおりに、手首をくると回してみる。 小学生「そうそう。うまい、うまい!!もう1回、回してみて」 A児小学生に促され、嬉しそうに縄を回している。 小学生「次は、縄を回して縄の前に来た時に、ピョンって跳んでみて」 A児縄を回して跳んでみるが、縄が足にひっかかる。 小学生「大丈夫!こうやって、縄を回して足のところにきたらピョンと跳ぶねんで」と跳んで見せながら説明する。 小学生「次は、Aちゃん、やってみて」と根気よく繰り返し伝えたり励ましたりしてくれる。 A児なかなか跳ぶことができない。 A児「なんか、もう疲れてきた・・・」 指「Aちゃん、頑張ってるね。もう少しで跳べそうやね!!」 A児また縄を回しては跳ぼうと繰り返す。 自立心等 ○その時・・・A児が回した縄を跳んだ!! 小学生「Aちゃん、跳べたよ。すごいね!!」 指「跳べたー やったね」すかさず認め、一緒に喜ぶ。 A児表情がパッと明るくなり、にっこり笑った。 その後、縄が足にひっかかってまた跳んでみようとする。小学生に根気よく側で励ましたり褒めたりしてもらい、A児は次第に縄が足にひっかかることがなくなってきた。 健康な心と体、自立心、社会生活との関わり等 指「Aちゃん、跳べるようになってきたね。小学生のお兄ちゃんに何回跳べるか数えてもらおうか?」 A児「うん!」とうなずき、真剣な表情で縄を跳び始める 小学生「1、2、3・・・3回も跳べた!」 A児「先生、3回も跳べたよ!!」 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等 指「すごい、すごい!よく跳べたね! お兄ちゃんに教えてもらったり応援してもらって、嬉しかったね」 A児「お兄ちゃん、ありがとう!」 ○縄跳びタイム終了後 小学生「またね!」「いっぱい跳んでたよね」とA児に声をかける。 A児とても嬉しそうに笑って、小学生に手を振る。	徳小学生と安心して関わりがもてるよう、指導者がきっかけをつくる。 徳小学生が5歳児に分かるように、言ったり、見せたりしながら優しく接する様子を温かく見守り、小学生との関わりを十分にもてるようにする。 徳指導者もA児の頑張りをタイミングよく認めたり、励ましたりして、縄跳びへの意欲が持続できるようにする。 知・徳小学生に縄を跳んだ回数を数えてもらうことを通して、跳びたい気持ち高めたり、数への関心がもたれるようにする。 体自分で挑戦して縄を跳ぶことができた喜びに共感したり、認めたりして、自信や意欲につながるようにする。
---	---

○翌日から、今まで縄跳びに消極的だったA児は、自ら縄跳びに挑戦するようになった。

健康な心と体、自立心等

A児「先生、見て見て！今、4回跳べたよ！」

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等

指「わあ、Aちゃん、4回も跳べたの？！頑張ってるね！」

A児縄跳びをする度に、指導者に見せに来るようになった。

○ある日、園庭で4歳児C児が縄跳びをしていると、5歳児の子どもたちが園庭に出てきた。

A児「どうしたの？」

C児「縄がほどけない・・・」

A児「じゃあ、してあげる」と言って手伝う姿が見られた。

道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり等

指「Aちゃん、さっきCちゃんが困っているのを助けてあげていたの？」

A児「うん!!」

指「Aちゃん、優しいね。小学生みたいだね！」

A児「うん!!早く小学校に行きたいなあ!!」と、にっこり笑って、また縄跳びを楽しみ始めた。

体昨日の経験から自ら意欲をもって取り組もうとするA児を認めて、より継続していけるようにする。

徳年下の友達に思いやりの心をもって接する姿を認め、就学への期待が高まるようにする。

【考察】

- ・小学生との交流活動に、幼稚園でも親しんでいる遊びを取り上げたことで、子どもたちは気負わずに交流することができた。指導者は、子どもたちが小学生と関わるきっかけをつくって見守り、時には、助言したり励ましたりしたことから、小学生が子どもたちに積極的に関わることができ、子どもたちが小学生に対して安心感や信頼感をもつことにもつながった。

(健康な心と体、自立心、社会生活との関わり等)

- ・跳べたという達成感や喜びを感じている姿を、指導者がしっかりと受け止め、できた喜びに共感したり認めたりしたことが自信につながった。その後、根気よく取り組む姿が見られ、自ら挑戦する意欲が高まったことが分かった。また、ずっと寄り添い、教え、励ましたりした小学生に、優しさを感じ、憧れの気持ちをもつことができた。

(健康な心と体、自立心、社会生活との関わり、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等)

- ・小学生に優しく接してもらった経験から、A児自身も年下の友達に思いやりの気持ちをもって接する姿を、指導者が見逃すことなく認めたことは、自信や就学への期待をもつことにつながった。

(自立心、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、言葉による伝え合い等)

今後に向けて

- ・5歳児が就学するにあたって、今までの生活経験から得た様々なことにより、自信がもてるように、一人ひとりの頑張りや活動に取り組んでいる姿をしっかり認めていきたい。また、小学生との交流の中でお互いに育てたいことを確認し、活動の中でしっかりとおさえ、就学前の育ちを小学校生活につなげていけるように、小学校と意見交換もしていきたい。